

Title	大正期の日本人によるポール・クローデル受容：小牧近江がみたクローデル (1)
Sub Title	La réception de Paul Claudel au Japon de l'époque Taishô : Claudel devant Oumi Komaki (1)
Author	西野, 絢子(Nishino, Ayako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.2 (2020. 12) ,p.69 (112)- 81 (100)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小倉孝誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190002-0069">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190002-0069</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 大正期の日本人によるポール・クローデル受容

小牧近江がみたクローデル (1)

西野 絢子

## 序

2018年はフランス劇詩人ポール・クローデルの生誕150周年にあたり、外交官としても地球規模で活躍した彼の芸術・文学遺産の意味を問い直し、世界各地でシンポジウムや劇の上演を通じて祝福するイベントが行われた<sup>1</sup>。1868年、ちょうど日本の明治維新の年に生まれた彼が、青年期から憧れていた極東の地にフランス大使として駐在したのは、1921から27年のことであった。当時の日本は西洋の刺激を受けながら民主主義国家への発展を目指し、フランスというよりはドイツからの影響を受けていたが、彼はフランスの言語と文化の普及に努め、多くの講演を行い、日仏会館を設立するなどその後の日仏交流に重要な基礎を築いた。

来日前に滞在した中国での体験を『東邦の認識』に結実させたカトリック詩人が、日本においてもその自然と文化、能や歌舞伎、文楽などの伝統芸能を愛し、『朝日の中の黒い鳥』にその印象をまとめたことは有名である。日本の画家や芸術家とも交流が深かった親日家の彼が「詩人大使」と呼ばれ慕われたことは、散文詩『聖ジュヌヴィエーブ』を日本趣味の装丁で新潮社から出版し、俳句にインスピレーションを得た短詩集『百扇帖』を発行したのみならず、歌舞伎役者のために『女と影』を書いて上演させたことにも顕れている。また『日本詩人』や『詩聖』などの雑誌が記念号を発行したことや、親仏文藝会が『ゆかり』（改造社、1924年）を編集し「クローデル篇」を設けて献呈したことからも頷ける。その献辞からは彼が歓迎された古き良き時代の雰囲気伝わってくる。

この書は貴君に捧げらる、乃ち杳かなる吾らが岸邊に來りて沈思し而して之を歌ひたる高貴なる仏蘭西詩人、吾らの間に高き藝文の理想を齎し來れる莊頸甘美なる文人、而してその身仏蘭西の優雅秀麗を偲ばしむる貴君に捧げらるるものなり

著者一同

日本に「高き藝文の理想を齎した」西洋人という表現からは、当時の日本人が西洋を崇め、手本を示してくれるものとして見上げていた視線が読み取れ、いってみればE.サイードが批判するところのオリエンタリズムの図式、即ち未開の東洋を西洋が上からの視線で一方向的に読み解く図式を甘受していた感が否めない。実際クローデルの日本理解は、ピエール・ロチと比較すれば軽蔑的な視線が少ないものの、独自のカトリック的視点で抽象化された個人的なものであり、後のロラン・バルトやレヴィストロースを考えれば、まだオリエンタリスト世代の最後に位置づけられる<sup>2</sup>。

他方、日本人側もただ詩人大使を盲目的に崇めていたわけではなかった。名前だけが有名になった彼の作品を実際に読み、理解していた人は少なく<sup>3</sup>、万人がクローデル肯定派というわけではなかった。例えば彼自身は「成功」と評価していた『女と影』上演は日本人からの酷評が少なくなかった<sup>4</sup>。

「クローデルによる日本理解」と「日本（人）によるクローデル理解」はともに複雑な問題を孕んでおり、後者は前者ほど明確な見解が見いだせていない。本稿では後者を解明する一助として、大正期の日本人によるクローデル受容に焦点をあて、まずジャーナリズムにおける受容を概観したあと、ある社会運動家によるクローデル理解について紹介・考察していく。字数制限の都合上、本稿では紹介の前半で区切り、後半は号を改める。

## I. 大正期の日本におけるクローデル像

クローデルの作品がはじめて日本に紹介されたのは、1913（大正2年）年、『東邦の認識』所収の散文詩「椰子の木」を上田敏が『芸文』に発表した時とされている<sup>5</sup>。その後、厨川白村による紹介、堀口大学らが細々と詩の翻訳を続けるが、クローデル着任の報道を受けて1921年11月の来日前後、翻訳数は急増する。詩だけでなく『マリアへのお告げ』、『人質』など代表的な劇作品も翻訳されてい

く。到着後はかなりの頻度で様々な新聞が詩人大使の報道に紙面を割き、多様な文芸雑誌もこの作家に関する批評を多く掲載した。

大正期のジャーナリズムに彼を登場させたのは、主にフランス文学研究者たち（多くは大学人）および滞仏経験のある日本人ジャーナリストや文化人で、特に現地でクローデル劇を鑑賞したことがある人々であった。例えば朝日新聞のパリ特派員、重徳泗水は「駐日大使たる文豪クローデル氏の近業」において『マリアへのお告げ』や『男とその欲望』上演について報告している（『大観』1921年12月）。日本人に彼の文学を紹介する使命を持った仏文学者たちは、本国のクローデル批評<sup>6</sup>を参照しながら論考や記事を執筆した。上田敏も紹介していたレミ・ド・グルモン、G.デュアメル、J.リヴィエールの研究を読み、またJ.ド・トンケデックやP.ラセルの批評を通じ、これらも一部翻訳しながら検討したのである<sup>7</sup>。本国の批評家には、デュアメルやリヴィエールのような「クローデリアン」即ち絶賛・肯定派がいる一方で、そのような嘆賞の誇張を指摘すべく『文学的聖堂』（1920年）を著したラセルに代表されるアンチ・クローデル派がいた。この対立は日本でもそのまま並行輸入されたが、概して肯定派が多数を占めていた。

例えば早大の吉江喬松は「抒情詩人であり、劇作家である」クローデルを「世界の靈感上の解明者であり、天才的幻想家<sup>8</sup>」として紹介し、『マリアへのお告げ』のヴィオレーヌ、『人質』のシーニュなどの主人公に「人間神<sup>9</sup>」を見出し、劇の特徴を鋭く分析している。つまり紹介当初からややネガティブなキーワードとなっていた彼の作品の「難解さ」について、柔軟に解説し、弁護・正当化したのであり、この種の批評は少なくなかった<sup>10</sup>。また日本人が敬遠しがちな彼特有の「カトリシズム」も、まずは信者である木村太郎が「神の子」クローデルの思想的背景として重要視し、宗教的な熱意と共に解説した<sup>11</sup>。しかし信者でない多くの読者をひきつけるのは、クローデルのカトリシズムを「信仰無きわれわれの内心を強く撼かして、更に飛躍の志を立てしむる」ものとして昇華させた増田篤夫の批評である<sup>12</sup>。肯定派においては、言語や信仰の壁は不可侵ではなかったのだ。

しかし『三田文学』に「詩人ポオル・クロオデル」を寄稿した慶大の井汲清治は「哲学者、劇作家」としての彼を酷評し、『詩法』を引用して「どうしてかう、よくも下らないことが難しく云へるものだらう<sup>13</sup>」と述べた。ラセルの批評を引用し、権威ある「仏蘭西の文士」にさえ分からないものが「私に分からうはずはない」と告白している。ラセルの批評自体は重徳泗水により「クロオデル氏

賞讃は別に為す人が多いから」あえてこの批評を紹介する、という意図で『日本詩人』1922年6月号に掲載された。また『ゆかり』に「水時計——クロオデルの『芸術論』を讀みて——<sup>14</sup>」というやや不思議な随筆を寄稿し、クロードは「難解の人」と繰り返す山田珠樹もアンチに属するといえる。しかし、この哲学的コントのような小作品は、フランスの批評家が口をそろえて評価する彼の詩を了解できず、寄稿するのに弱り果て、「仕方なく」筆をとったものであるという<sup>15</sup>。辛辣な批判を書くよりは紳士的かつ生産的な選択といえる。

辛辣な批判の代表例は正宗白鳥の「『女と影』を評す<sup>16</sup>」である。外国人の東洋趣味に「下らない唄」が入った作品で、「あまりに詰まらなすぎるので何か深遠な意味が潜んでいるのか」考えたが見いだせない、というような論評が上演前に『時事新報』に掲載されたため、前評判を汚し酷評を導いたといわれている。しかしこの状況を見て芥川龍之介は「偏狭な日本人に却けられたことをクロオデル大使のために遺憾とする<sup>17</sup>」述べていた。とはいえ大正期の日本の文豪の中でクロードリアンの例を探すのは難しい。彼にやや同情的な発言をした芥川でさえ、嘲笑的な調子で、ある時能楽堂に「まるまる肥った仏蘭西の大使クロオデル氏」の姿をみて「ドオミエの一枚じみた看客」と記し<sup>18</sup>、また大使が「欠伸をし」ながら鑑賞し、「半可通をふりまはす」ことに親近感を覚えると述べている。彼の信仰と文学を批判したのは島崎藤村で、「ほんとの信仰の固い人は、黙っている人に多いやうです。クロードといふ人の書いたものは、ずい分お喋りが多いようですね<sup>19</sup>。」と語った。正宗、島崎はいずれも棄教者であるが、信仰の問題も含めて異国の同業者に対するライバル心のような複雑な気持ちを抱えていたのかもしれない。

以上、一部ではあるが、大正期の日本人がどのように彼を捉えていたか、否定派の存在にも注意しながら概観した。これから日本のクロード肯定派の一人に注目するが、彼は仏文学者・山内義男のような、大使と親交を結び通訳としても常にそばにいた側近・エリートでもなく、また吉江喬松のような、彼の文学紹介に尽力した正統派の大学人の部類にも属さない。それは「プロレタリア文学の父」とよばれた社会運動家、小牧近江（1894-1978）という人物である。彼は右派のフランス大使をどのようにみていたのだろうか。

## II. 小牧近江とクローデル

小牧が書いた彼に関する主な記事は二つ確認できるが、それを取り上げる前に、16歳からの10年間、青春時代をパリで過ごした彼の数奇な人生を概観し、クローデルとの接点をみていきたい。

小牧近江（本名・近江谷駒）は秋田の豪商近江谷栄次の長男として土埼に生まれたが、「フランスびいきでナポレオンを崇拜<sup>20</sup>」していた父の意志で上京し、暁星中学校に入学した。国会議員であった父は息子を外交官にしようとしていたのだ。同級生には山内義男がいたが、近江谷家の家業は傾き月謝が払えなくなる。1910年、父がブリュッセルで開かれた万国議員会議に出席することになると、小牧は中退して同行した。会議が済むと、父は息子をパリの名門アンリ4世校へ入学させて帰国し、一人残された小牧は、ほどなく送金が途絶えた為、授業料滞納で放校されてしまう。異国の地で「ブルジョワ息子からどん底に落とされた<sup>21</sup>」彼は何とかパテ商会という織物問屋で働き口を見つけ、屋根裏部屋で極貧生活を送った。労働後はグルネル町の貸本屋や夜間学校に通っていたが、ある時、父の友人であった在仏日本大使の計らいで、大使館で働き、大学にも通わせてもらえることになった。ロマン・ロランに心酔していた文学青年は晴れてソルボンヌ大学法学部生となる。

1914年、第一次世界大戦がはじまる不穏な雰囲気の中、ジャン・ジョーレスが暗殺されると、小牧は「反戦運動のリーダーが国粋主義者によって暗殺<sup>22</sup>」されるという事実衝撃を受けた。平和思想を植え付けられた彼は、次第にアンリ・バリュビュスの反戦思想に共感していく。かつての極貧生活の思い出は、労働者を描いたシャルル・ルイ・フィリップの作品を愛読させた。反戦平和運動をつづけながら、1918年に大学を卒業すると、彼は大使館を辞職した。もはや「外交官などでは世界に平和をもたらすことはできない<sup>23</sup>」と考えたのである。恐ろしい戦争が終わり、バルビュスと会って「クラルテ運動」（「共産党とは一線を画した反戦・平和主義に基づく文化運動組織<sup>24</sup>」）に参加した小牧は、日本に平和運動を広めることが自分の責務と思い、帰国を決意する。1919年のパリ講和会議の折、抜擢されて日本全権団事務嘱託として働いた後、10年過ごした異郷を去るが、その折にパリ生活の思い出にと、豪華版屋ベルヌアールが『詩集』を刊行してくれた。挿絵は友人でパリ画壇の寵児となる、あの藤田嗣治によるもので

あった<sup>25</sup>。藤田にとって絵が天職であれば、小牧にとってのそれは国境を越えた人類愛・反戦平和運動を広めることである<sup>26</sup>。

コミンテルンの運動と関係して帰路でスイスに立ち寄った小牧は、非合法のジュネーブ発行の雑誌『ドマン』を入手した。ロラン、レーニン、トルストイが寄稿したこの雑誌は、各国の利害を超えたところに反戦思想の根本があり<sup>27</sup>、彼の理想を体現していた。父の表現によれば「赤くなって」帰国した小牧は<sup>28</sup>、それでも1920年から外務省に勤務した。しかし同時に彼は旧友金子洋文らにクラルテ運動を説明し、共に反戦平和、人道主義、革新思想を基調とした同人誌『種時く人』を刊行した。『ドマン』を手本に1921年2月に第1号を発行（編集・東京、印刷・土崎）、ついで2、3号と順調に発行されたが、新聞法の保証金が払えず休刊した。小牧は2号に『ネーション』からの抄訳「第三インターナショナルへの闘争」を掲載したので、『種時く人』は表面的には文芸雑誌でありながら、日本ではじめてコミンテルンの紹介をしたことになる<sup>29</sup>。しかし10年ぶりの帰国で知り合いの少ない小牧は執筆者を集めるのに苦勞していた。そこに現れた転機がクローデル大使来日であった。

外務省でフランスの出版物を読み、翻訳し、紹介する仕事をしていた彼は、クローデルの歓迎会や講演会の組織に関わった。「クローデルが来日した時には、フランス文学に興味を持っている者たちが集まり、諸大学の学生が中心となり歓迎会を組織しました。そういう機会に、私はいくたりかの文芸家たちと知り合いになったのです。<sup>30</sup>」

1922年1月15日、フランス研究団体主催のクローデル歓迎会が行われ、吉江喬松や島崎藤村らの講演、クローデルの原詩とその翻訳の朗読、クローデルの講演、そして外語大生による『1914年降誕祭の夜』の上演があった。クローデルが日記に保管していたプログラム<sup>31</sup>に、小牧の名前は顕れないが、この場に同席し、日本人の知り合いを集めていたのである。休刊していた『種時く人』（東京版・4号～）は、このようにして新たな執筆者を加え、東京版の創刊号がスタートしていたが<sup>32</sup>、すぐ発禁となってしまった。その後発禁が重なり、内部分裂が生じ、しまいには1923年9月の震災の痛手を受け、『種時く人』は全24号で終了した。外務省を辞職していた小牧は以後、運動から遠ざかり、フィリップ、ジッド、ラディゲ等のフランス文学の翻訳に尽力した。新聞記者になったこともあったが、1929年トルコ大使館に勤めた後は、インドシナへ渡り、第二次世界大戦



後に帰国した（ハノイでもフランス語の散文詩集を發行）。1951年、法政大学社会学部教授となり余生を送る。

以上、夏目漱石や森鷗外のように留学の目的・期間が定められた外国生活をしたわけではなく<sup>33</sup>、また藤田嗣治や高村光太郎のように目的がはっきりしたわけではない外国生活を送った小牧は、苦学しながら多くの友と書物に触れ、近代戦争の惨事を間近にみて反戦平和運動の「種蒔く人」となったといえる。「文学家肌の社会運動家」という一見相矛盾するような要素をあわせもった小牧。クローデルについて彼が書いた二つの記事は、まさにこの対照的な傾向が反映されている。まず『日本詩人』1921年11月号に掲載された「ポール・クローデルの印象」には文学家の感受性が色濃く表れており、『種蒔く人』1923年1月号掲載のシャルル・ルイ・フィリップの追悼記念会における「ポオルクロオデル氏の講演に就いて」は、社会運動家の声が強く響いている。

### III. 小牧近江によるクローデル紹介

「ポール・クローデルの印象」（『日本詩人』1921年11月号）

「私はポール・クローデルを個人として知っているのではない」と始まる5頁弱のこの記事には、小牧が「一傍観者として氏の風貌に接した」二度の機会、1916年11月4日のマチネ・クローデル（作品紹介の朗読会・講演）（於・ジムナーズ座）と、同年12月の『人質』再演（於・アントアン座）で彼が受けた印象が中心に綴られている。発行された時期は大使来日と重なり、小牧は外務省に勤務しながら『種蒔く人』2号を発行させたところであった<sup>34</sup>。

1916年のマチネ・クローデル（小牧は17年と誤記）を鑑賞したとき、小牧は大使館に勤務しながらソルボンヌに通う文学青年であった。オデオンにあり、クローデルの日記にもよく登場するマダム・ムニエ（Adrienne Monnier）の本屋に通い、常連の文学愛好者の特権である作家の朗読会などに参加していた<sup>35</sup>。「ベルギー国民救援の目的」で戦争中に開催されたこのマチネは、小牧が言うように、外交官である関係上、文壇的な場に顔を出すことの少なかったクローデルが一般の読者に顔を見せる珍しい機会であった。この朗読会の様子はクローデルの日記、およびこの会で『真昼に分かつ』のイゼ役、散文詩『カンタータ・ア・トロア・ヴォア』（La cantate à trois voix）の朗読をした女優エヴ・フランシス（Ève



Francis)の回想録からも確認できる。クローデルお気に入りのこの女優によれば、この場にはクローデル夫妻や友人のほか、「メルキュール・ド・フランス」やNRFのメンバー、ベルギー詩人ヴェラーレン等、「あらゆる知識人のエリートたち」が出席していた<sup>36</sup>。この中に小牧も同席し、注意深く耳を傾け、上演後に「一瞬静まり、立ち上がって歓声をあげた<sup>37</sup>」観客の一員となったわけである。

おそらく数少ない日本人の小牧は、まずクローデルの講演から、作詩法や「アルカイックな」字句の配列について言及し<sup>38</sup>、ジャック・コポーによる朗読の印象をこう語る。「コポーの腕にもよった」のかもしれないが、「クローデルの作には他に見られぬ偉大さがあった。(例えば『東方の認識』所収の散文詩「鐘」La clocheに)ある種宗教的な敬虔と人間の凡性から脱けた強さを感じる。」

「鐘」の物語はかうである。支那に一鑄造工がいた。この男が、いくら鐘をつくって見ても、鐘のなり音に魂がない。その男が苦しむ。その男に娘があつた。その娘が父の苦心のために、わが身を熔爐にささげる。それから以後、鐘のなり音には生霊のさげびがあった。ああ、クローデルはあの荘嚴な字句と詩調で、なんといふ大きなそして廣いものを私達に與へるのだらう。クローデルはカトリックの思想で東洋の思想と神秘を、その根底から見破ってはいはせぬか<sup>39</sup>。

小牧が述べる通り、地球規模の詩人クローデルは、東洋の事物を前に、独自の「聴く目」でその意味を解き明かして詩作品に昇華させる。この作品は中国のある鐘について、ラフカディオ・ハーンの話も参照しながらライトした、恐ろしくも美しい乙女の「犠牲」の詩である。カトリック詩人の手により、東洋の素材もそこから普遍的なテーマに焦点があてられ、幅広い読者をひきつけるものとなる。国境を越えた人類愛を希求する小牧はこうして「偉大なもの」を与えられたのだ。

三人の女性がそれぞれ愛する三人の男性の「不在」を美しく歌う散文詩『カンタタ・ア・トロア・ヴォア』について語る小牧の耳は、フランス人のそれと等しい。クローデルが重視している詩の音楽性を、単にフランス語の意味がわからなくてもきこえてくる音としてではなく、内容を深く理解し心の中に吸収して聴いているのである。

散文であるクローデルの詩は、いかに合唱的調和美をもっているか（…）それはまるで音楽美といい。この作品は）三人の合唱詩である。夏のたそがれまだ昼とも夜ともつかぬ頃、三人の女がめいめいの思ひをうたふ。ひとりには夫を失った女、他のひとりには夫を戦地に送った女、またもう一人は明日結婚しやうとする女、これらの瞑想のうた、不安のうた、とそして希望のうたは三部詩となって総合のメロディをなしている。（ibid）

そして「これは明らかに音楽である」と述べた小牧の意見は、朗読したフランスにクローデルが語った発言と共鳴する。「詩は音楽のように把握されるべきだ。私が2分音符、4分音符、そして拍子を重視しているのはご存知でしょう<sup>40</sup>。」

マチネの翌月<sup>41</sup>、クローデルが次の任地ブラジルへと「まだ赴任されぬ前にと」『人質』が上演されたアントアン座で、小牧は彼が「ジッドなどと暗いベニョールの中で」観劇していた姿を目撃した。1910年の初演時、最終場面をめくり問題となったこの作品を、5年以上経過してもまだ理解せず「馬鹿らしく取り扱った模様」の観劇者の様子——「中には口笛をふくものすらあった」——をみた小牧は、クローデルが「気の毒であった」という。小牧がどの日に鑑賞したか確定はできないが、11から17日まで例外的に8回上演していたこの作品について、クローデルは「徐々に成功している<sup>42</sup>」と記している。ともあれ、小牧は彼の作品がしばしばフランスにおいても理解されていない状況について、肯定的に弁護している。

私達は決してクローデルの作は我々を感動させぬものでないと思ふ。私はこの感じを「人質」の中で、女主人公のシニューが一門復興のためと宗教のために、彼女の嫌っているチルリ将軍に結婚を許諾する対話を、かうした対話の中で、今までありふれたものの中に見られぬ深刻なそして廣意なものだと思った。ここに宗教の強い力があつた。不幸にも私はカトリックの信念にはあまりにかけはなれているものであるが、それでいて私はある感動に打たれたことを白状する<sup>43</sup>。

クローデル文学の重要テーマの一つ「犠牲」を悲劇的に体現するヒロイン、シニュー。先にみた散文詩『鐘』では東洋の娘の「犠牲」が描かれたいた。そこで小牧は「偉大さ」「強さ」「大きな」「広い」という言葉を用いて印象を表現した。

ここでも西洋の娘シーニュの犠牲劇の印象は「廣意な」「強い力」という言葉で語られている。今までにない人間の力を超えるような偉大さがクローデル作品に宿っていることを小牧は感じ取り、まさにそれゆえに感動し、感動するのに信仰の有無を問わない、と彼は理解したのだ。

信者ではないがクローデル作品に感動する例は、肯定派の増田篤夫の例を既に見た。しかし一読者の増田と異なるのは、小牧が実際の舞台を観た点である。観客の感動は、役者の演技に拠るところもある。シーニュを演じたフランシスは自分の役者としての使命は、詩にこめられた知性や魂を明らかにすること、と述べている<sup>44</sup>。作者クローデルの詩魂が役者フランシスを媒介に、観客小牧の心に浸透する、という演劇の三位一体が理想的な形で行われたのであろう。信者でもない日本人の小牧はこのようにクローデル劇の観客となり、以下のように記事を締める。

（彼の）劇作を彼の詩と切り離すことはできない、もし切り離したら生命がなくなるだろうと思い、それこそが彼が他の作家と異なるところだと思う。この意味からクローデルの作は全部詩である。すでに詩である以上、これに感ぜぬ人はなからうと思ふ。(ibid)

パリを去る前に自分も詩集を出すことになる小牧。ヴェルレーヌ風のやるせなさが漂うその詩集にクローデルの影響をみることは難しいが、クローデルの作品が詩心のある小牧に届いたことは確実といえる。大正期、多くのクローデル紹介がなされる中、小牧によるそれは、具体的な例をもとにわかりやすく解説した、恐らく読者にとって近づきやすいものであった。アカデミックな学者の研究論文風の記事ではなく、またフランス批評を鵜呑みにした紹介文でもなく、半分フランス人のような小牧が批評の媒介無しに自分の頭と心で感じ取った結果である。そのような記事こそ一般読者の心に広く届くのである。

今回は小牧自身の雑誌『種蒔く人』に掲載された、プロレタリア作家フィリップについての講演会の報告文を検討する。小牧が心酔していた民衆的な作家について、「ブルジョアフランスの代表」で右派の芸術家クローデルという『種蒔く人』の立場とは一見交わらない人物の見解は、小牧の考えと重なる部分があったのだろうか。はたしてその筆は『日本詩人』の記事と同様の文学的なトーンを保つことができたのであろうか。(つづく)

## 注

- 1 慶應義塾大学でもシンポジウム「ポール・クローデル——日本：交叉する視線」が行われ（『藝文研究』115号、2018年、98–101頁に報告掲載）、シカゴでは「クローデルの世界主義」について（5月）、パリでは「クローデルにおける同時代」について（9月）議論された。本稿はシカゴとパリで発表した内容を元に日本語で改変を加え発展させたものである。シンポジウム論文集 *Paul Claudel, aujourd'hui* は2021年1月 Classiques Garnier 社より刊行予定。記念行事の詳細は <http://www.paul-claudel.net/2018-cent-cinquantieme-anniversaire-de-la-naissance-de-paul-claudel>
- 2 例えば能の解釈は鋭い観察眼に貫かれてはいるが、自分の劇作術を投影して、地上の劇を天上の劇に昇華させる演劇形態として捉えていた。しかしそれは生産的な誤読であることも事実で、例えばキリスト教的視点で解釈された能は劇的オラトリオ等に変奏されており、それがまた日本人により新作能に生まれ変わるなど、日仏文化交流を豊かなものに行っていることは意義深い。
- 3 Albert Maybon, « lettres japonaises », *Revue de la Quinzaine*, 1<sup>er</sup> Mai 1923, *Mercure de France*, p. 823.
- 4 Cf. Ayako Nishino, « La réception japonaise des Nô claudéliens : *La Femme et son ombre*, de 1923 à 2005 » in *Paul Claudel et l'histoire littéraire*, Presses universitaires de Franche-Comté, 2010, p. 465-478.
- 5 天野敬太郎「日本におけるクローデル文献」『日仏文化』1968、大出敦「クローデルには桂を捧げよ」『三田文学』2005年、『日本におけるポール・クローデル』——クローデルの滞在年譜——、中條忍監修、クレス出版 2010年。
- 6 全作品を対象とし、ある程度定説化した今日のクローデル批評と、同時代の研究とは区別が必要である。1921年の時点で注意すべきは、『真昼に分かつ』のモデルとなった私的な事件の真相が明かされていないことと、集大成である『繻子の靴』が完成されていないことである。
- 7 Remy de Gourmont, *Le II<sup>ème</sup> Livre des Masques* (*Mercure de France*, 1898) は1923年3月『嶽水会雑誌』83号に一部翻訳され、Georges Duhamel, *Paul Claudel*, (*Mercure de France*, 1916) ; Jacques Rivière, *Paul Claudel, poète chrétien* in *L'Occident*, 1908) は1923年5月『日本詩人』3巻4号5月号に抜粋の形で翻訳された。
- 8 吉江高松「ポール・クローデルの著作の鑑賞」『詩聖』2巻1号、1月号、1922年、3頁。
- 9 吉江高松「ポール・クローデル」『改造』1921年 11月号、101頁。
- 10 Cf. 柴田勝衛、「ポール・クローデルを迎ふ」『早稲田文学』第189号、1921年8月号、36頁。
- 11 木村太郎「加特力詩人ポール・クローデル」『日本詩人』3巻、4号、5月号1923年。
- 12 増田篤夫「『聖ジュヌヴィエヴ』の解説」『日本詩人』3巻、4号、5月号1923年、61

- 頁。
- 13 井汲清治「詩人ボオル・クロオデル」『三田文学』1921年12月号、42頁。
- 14 山田珠樹「水時計——クロオデルの『芸術論』を讀みて——」『ゆかり』、親仏文藝会、改造社、1924年、239-241頁。
- 15 山田珠樹『現代仏文学研究』聚芳閣1926年、19-22頁。
- 16 正宗白鳥「『女と影』を評す上」時事新報1923年3月3日、「『女と影』を評す下」時事新報1923年3月4日。
- 17 「続野人生計事」「女と影」：筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷、1979年4月10日初版第11刷。
- 18 「金春会の隅田川」「芥川龍之介全集 第十一卷」岩波書店 1996年9月9日発行。
- 19 柳澤健「島崎藤村氏と語る」『現代の詩及詩人』尚文堂、1920年、281頁。
- 20 小牧近江『ある現代史——「種蒔く人」前後——』、法政大学出版局、1974年、10頁。
- 21 小牧、前掲書、26頁。
- 22 北条常久『種蒔く人、小牧近江の青春』、筑摩書房、1995年、61頁。
- 23 北条、前掲書、140頁。
- 24 渡邊一民、「『クラルテ』と『種蒔く人』」、『フランスの誘惑——近代日本精神史試論』所収、岩波書店、1995年、49頁。
- 25 Quelques poèmes par Monsieur Komaki Ohmia décorés par Monsieur Foujita, se trouve A LA BELLE EDITION, 1919. 詩集は各頁の挿絵の写真と共に林洋子氏の試訳付きで閲覧可能（『藤田嗣治 作品をひらく』名屋大学出版会、2008年、87—94頁）。藤田のブックワークとしてのこの詩集の分析は前掲書82-97頁を参照。藤田はクロアデルと直接の交流はないが、『朝日の中の黒い鳥』等3作品を装丁し、邦訳本の出版にも関わった。（林洋子、『藤田嗣治 本のしごと』集英社新書ヴィジュアル版、2011年、66-72頁、151頁参照）
- 26 北条、前掲書、140頁。
- 27 北条、前掲書、112頁。
- 28 北条、前掲書、168頁。
- 29 小牧、前掲書、68頁。
- 30 小牧、前掲書、69頁。
- 31 Paul Claudel, *Journal, tome I*, Paris, Gallimard, coll.« Bibliothèque de la Pléiade », 1969, p. 1325-1326.
- 32 クローデル来日前のヴェルレーヌ祭（1921年5月）も同様な機会となっており10月に発行。
- 33 北条、前掲書、5頁。
- 34 最新情報としてパリの新聞から、東京で仕上げるつもりのスペイン風形式の劇（『繻子の靴』）のことも伝えている。

- 35 小牧、前掲書、40頁。例えばジュール・ロマンの詩の会に参加し、観客の中にアボリネールを確認している。ムニエ夫人は1919年5月にマチネ・クローデルを企画した。
- 36 Ève Francis, *Temps Héroïques Théâtre Cinéma*, Paris, Edition denoël 1948, p. 340.
- 37 Ève Francis, *op. cit.*, p. 343.
- 38 「多くの詩人は散文から韻文を組み立てるのであるが、氏の作法はこれとは全々正反対に韻文から散文に組み立てているのである」講演文は未刊で部分的にしか出版されていないため該当部分を確認することはできないが、類似する箇所の内容を参照すると小牧の解釈はやや拡大的すぎるが、未刊のため判断は難しい。Cf. Paul Claudel, *Œuvres complètes*, t.XVIII, Gallimard, 1961, p. 460.
- 39 小牧近江「ポール・クローデルの印象」『日本詩人』1921年11月号、73頁。
- 40 Ève Francis, *op. cit.* p. 338
- 41 マチネの後、アンチ・クローデルの批評家P.ステュエが彼の「ブルギニオンなまり」を指摘したが、秋田出身の小牧はそれに言及しながらも「打ちとけたもの」と温厚にまとめている。
- 42 Paul Claudel, *Journal*, tome 1, Gallimard, 1969, p. 365.
- 43 小牧、art. cit. 74頁。
- 44 Ève Francis, *op. cit.* p. 343.